

1. 研究目的

東京都内における賃貸住宅居住者の割合は5割を超える。その人達の生活スペースは狭い。にも関わらず諸外国の生活様式を多く取り入れるため家具が多く混在し、狭さをよりいっそう際立たせてしまう結果になっている。その問題を解消すべく、布団の使用を推奨し、1R(ワンルーム)賃貸などの狭い空間を有効に活用できるよう布団の収納方法を提案したい。またこれにより、日本人に定着した布団の価値を見直す。

2. 調査と分析

賃貸住宅の多くは単身者用に作られており、広さ20平方メートル前後の狭い床面積である。実際の生活スペースはより狭く、クローゼットのない物件も多い。生活例として、物を増やさずスペースを有効的に活用する理由から、居住者は家具を減らしベッドを椅子代わりに利用している事例が多い。しかしこれではベッドが生活スペースの大部分を占領してしまい、就寝以外の空間使用用途を制限してしまっているように思える。そこで就寝時以外はたたみ、上げ下ろしによりスペースを生み出す利点を持つ布団の使用を推奨する。だが布団の使用は、収納場所がない、湿気に弱い、手間がかかるなどの理由から、敷いたままの状態がおこりやすく、また使用自体も敬遠されやすい。本来のたためる寝具としての利点を生かし、布団を使いやすくし、そして制作物によって、限られた広さの空間を如何に効率良く使用するかが本研究のポイントとしてあげられる。

3. コンセプトの立案

「スペースを有効活用する為の布団収納具」

- ・布団に収納時と使用時の通気性を与える。これによりメンテナンスのしやすさを向上させる。
 - ・布団収納時に座れる。収納具に座るという機能を持たせ、従来の寝具と椅子のスペースが他用途に使用可能となる。
 - ・重さを感じさせない造形。転居などの多い単身者を考慮。
- 以上の条件をふまえ収納具のデザインする。

4. デザイン展開

スペースを確保するにあたり、収納具自体は省スペースでなければならないと考え、注目したのが「包む、巻く」という行為である。日本人が元来行ってきた事であり、立体物に合わせ覆うという行為が省スペースな布団収納に最適だと考えた。そこで細長い木製の板、十数枚を布製のバンドで接続し、いわば大きな簾(すだれ)、もしくは巻くことが可能なすのこの形状とした。布団収納の際はこれを円柱状に丸め、布団をたたみ中空のスペースに収める。そして、構造体上部に座れる設計とした。本来巻ける方向とは逆に巻こうとすることで円柱状の構造は中に何もなくても形を維持する。既存の押入れ、クローゼットへの収納とは対照的に上げ下ろしの度合いが低く、収納時に通気性がよい収納方法を取り入れた。就寝時は展開した状態で布団の下に敷き、すのこのように用い、就寝時の通気性をも高める。また使用しない時、転居をする際は順当に巻けば、簾のようにコンパクトになる。見た目も簾を連想させ、重みを感じさせないデザインとした。

5. 完成図



6. 結論

ベッドを使用している1R住まいの単身者からの評価を得た。就寝時、収納時の通気性が向上するので布団を使用したいと思う、しかし重さが気になるなどインテリアとしての造形再検討の要望や意見を得た。スペースの確保という点においては効果的であるとの評価だった。

7. 参考文献

内田繁『インテリアと日本人』晶文社・2000年